

直を言へば其藝者の仲でも、實に眞面目な考へを以て心立の勝れたのもあるさ、然し何んな場合でも僕を決して溺れやせんし、自分を忘れもしないのだ。けれど唯つた一人僕は非常に感心して居るのがあつて、正直お前に丈白状するが其女とは切つても切れぬといふ譯になつて了つたのだ。日外正月頃向島の堤で二人歩いて居た時山田に遇つたのさ。」

「まあ夫を今迄私共に隠してゐらつしやつたんですか。」

「夫は山田から固くとめられて居たから僕も信義を守つて彼が言ふが儘に秘密を守つて居たのだ。」

「ではお兄さんは其藝者を奥さんになさるの。」

「僕の意見は縦令賤しい女でも心や行が立派なら、不節操な貴婦人や虚榮心に憧れる女よりも遙か増したと思ふがさて日本の習慣として又家柄としてはどうも藝者を正妻にするといふ事は恥づる處、又僕の主義さへ通ればいゝと言ふのでもないから、實は考へてゐるのだ。」

「其様にいゝ女なら之から一生懸命御教育なさつて他方面で仕上た上お迎へになつては。」

「さア僕も實は考へてゐるのだが捨るも惜し捨ざるも何とやらアハ、ハ、ハ。」

「お兄さん笑談では御座いませんよ、私の身が定まるにつけてもお兄様の事が心配になつては、何が嬉しう御座いませう、どうかよくお考へ下さいますして家の名とお兄様のお身の障りにならぬ様にして下さいまし。」

「眞實にお前は僕の事を思つてくれるよ、僕は天地に大事なく可愛い妹といふのはお前許りだから必然お前の忠告を聞くよ。必ず心配せず立派な山田の妻となつて夫の事業を助けなさい。なに、まさかの時は兄が身に代へてお前方を保護するよ。」
此兄と此妹、何の秘くし事もない實に美しい兄妹だ。

第五十一

葉の上から他手に育てられ、生みの父母は憐れや夢にも知らず、渦の中になり

取るにも足らぬ八百屋風情の娘として、十五の年から柳橋の藝妓やへ養女にやられ、十七の年から左禰とつて、そんじよ其處らに知らぬ人なき嬌名を唄はれる様になつたのは素より標緻の美しいのも第一だが其品行、性質の奇抜なのは近頃の賣り物となつて俠妓よ名物女よと稱へられて今年は二十二の盛り時引く手数多に袖千切れても、いつかな首を縦には振らない執拗女で、千金を積んで手活の花にせん萬金を積む宿の妻と玉の輿が迎に來てもふんんとせつら笑つて對手にもせず、金は天下の融通物、賤しい稼業の私にはお金の顔もお芋のおふかしも同じ様に見えますわ、オホ、お間違ひなさんすなと拗ねる才一層に競つて手折らうと焦るお客を、敬して遠ざける新武藏屋のお京が命迄と打込んだ男は唯だ一人。

「私は此處が生れた處だと言はれてから色んな事を人から聞かせられて一度は來て見度いと思つて居るんですわ、漸つと願が叶つて連れて來て戴けば何にもかたなしだわ。」

「然し何處かで誰れかに聞いたら判るだらう。」

男女の二人は南總大原海岸を歩きながら、樂しさうに又物思はし氣に濱邊を彼方此方と彷徨ふて居た體で二人は日在村のある漁師の家の戸口に立つた。

「一寸御免なさいな、あたしはこゝいらに昔居たとかいふ清吉といふ家を尋ね度いんですが御存知なら教へて下さいな。」

「あんだて、清さんけえ、あゝお前さん知んねエか、五六年前に山田誠一てニ野郎にお前喰つて掛つたんで殺されたやがねエ。」

「おゝそんならあの山田の入獄事件は此事だ、僕がよく話す友人山田の事だよ。」

「あらまアさうなの、喫驚したわ夫から叔父さん後は何うなつたの？」

「お君ッ子といふえれい別嬪の娘が唯だ一人残つたつげがお前さん源藏といふ人の嫁になつて北海道の方へ行つたさうだよ、所がお前さんつい此間其の源藏も誰かにおつ殺されて了つたさうだて、加之にお君ッ子の行方は知れねエさうだが、眞逆あの子が亭主を殺しもしめいと皆がさういふだて、確か男の子が一人あるさうだよ。」

「まア何うしたんでせう、其んなら貴郎其のお君といふのは確かに私の姉さんだわ。」

「夫では君、其娘の所在は國元へも知れんのかね。」
 「はア些も知んねエよ、けんども清さんにはもう一人女の子があつて生れると直ぐ遣つて仕舞つたさうだ。」

「あら必定夫が私だわ。」と小聲で女は男に囁いた。

「他に親類も何にも此村には居らんのかねエ。」

「はア清さんは素と他處から来た人だから親類はねエやうだ。」

「まア叔父さん色々聞かせて下さつて難有う此は少しですが子供にでも上げて下さいな。」と紙に包んでお金を出した。

「何するんだか、其様な心配は廢しておくんなさい。併し清さんのお墓は直き此裏の善福寺にありやすからお参詣でもしなせ親戚の人なら。」

「難有う、お参詣をしますわ、どうもお邪魔を致しました。」と二人は再び海邊に出た。

「どうも實に世の中は不思議なものだねエ、お前のお父さんは山田とは敵同士だったが、然しよく聞けばお前のお父さんは悪人だつたさうだから山田を責める事は出来ん

よ。」

「然うですとも、お話を伺へば山田さんの様な潔い方はないんですもの些とも恨みは致しませんわ。けれども姉さんがあるなら其お君といふ人を尋ね出して見度いものねエ。」

「萬一すると山田が知つて居るかも知れんよ聞いて見ようか。」

「好い機があつたら聞いて下さいまし、然うして何時貴那のお妹御さんは山田さん許へお嫁入りなさるの?。」

「多分今度の愛隣會と山田の事業の合併披露の大會があつてからだらうよ。」

「まア他人の事は羨やましいわねエ、何故私は斯様な身に生れたんでせう。」

第五十二

人の信は天にも通するといふ譬の如く、山田の事業は終に貴婦人等の認むる所となつた。即ち愛隣會の女子授産場は其儘擴張を計るとして、其他の方面の發展は絶て、

「友の家」なる山田の事業を助けて、益規模を大きくする事に力を注がうと、婦人方は皆奔走されつゝあつた。終に、至尊陛下恩賜の金圓を基とした濟生會は先づ此貴婦人慈善事業の好成績を認め、決議の末若干の補助を毎月與へる事に定まつたのである。如何に上より下に至る迄社會改良、忠君愛國の念を固からしむるには其徳下民に及ぶに如かずと考へられたかは此大なる福音によつて判つて居る。

中野に於ける山田のホームは遽に家の増築やら救濟を求め人々の取調べやらで日夜多忙を極める様になつて來た。然し今迄の様に山田一人の責任許りでなく、貴婦人方が交る／＼來ては助けつゝあつた。無論大村文子や佐藤幾江は最も熱心に働らく人々で仲にも幾江は近い間に山田の妻として眞の片腕となる約束が、佐藤家と山田の間に済んでいたので、人々は山田の爲めによき助け手を得たとよるこんでいた併し獨り心にすまぬのは佐藤家の後妻となつた虚榮の一塊菊子であつた今更山田の人物を見誤つたのを恥かしく思ふよりは山田に對する自分の秘密を娘幾江に知られるのが残念であるのだ。併し後妻の身分として夫は兎も角佐藤家の世継ぎたる保の意見に逆らつ

たなら自分の身の破滅となるのであるから、痛し痒し、口惜しくもあり辛くもあるが、表面だけは何事もなく心から喜ぶ様に見せかけて居た。常には惚い佐藤も愛娘の一世一代の結婚には後妻の權利を主張はせる餘地がなかつた。

愈濟生會からの補助に依つて、新築落成事業擴張の計畫も追々運んだと同時に社會の注意を促したのは、空前の結婚、即ち所謂貧民の親方と、日本で一二を争ふ富豪の令嬢とのニユオンだ、然も前科者として人に知られた山田ではあるけれど、氣品の尊くして、其行ひは人の人たる可き模範人物として社會が許して居た。嗚呼天の配劑は實に妙を得て居るではないか、斯くてこそ社會は神聖なる者と言はるゝであらう。富豪の花嫁の輿入の調度は幾棹か、其の幾襲の振袖の袂は何模様かと思れば人々の驚いたは無理もない。結納仕度の代りに佐藤家からは銀行手形で金五萬圓也の贈物に恭しく水引長熨斗を添へて、媒妁人役の大村が持參した。目出度式は済んで結婚の披露會は新築落成式と、事業の發展とを祝ふものと合せて園遊會を催す事となつた無論質素ではあるが喜ばしい事の重なつた事であるから、招待狀を出した知人友人許りでも

大人でであつた。

「友の家」に居る孤兒は勿論、病人でも授産場の女達を始め他の貧民の集まつた數は來賓の三倍四倍であつた知るも知らぬも天下の美事として耳を傾け同情を寄せ、餘興の寄附菓子、寄附物品の寄附で山より高く積み上げた數々を見た時の貴婦人や山田夫婦、保等の嬉しさは何うであつたらうか、感極まつて天を拜し、地を拜し皆手足の折れる程に疲れるのも知らずに憐れなものを喜ばさうと働きつゝあつた。

強りつめた天幕の内は來賓で溢れてゐた。皆静肅に此大事業が斯く成功した事を深く心に銘して彼方此方と嬉しさうに歩き廻てゐる幸福な人々を眺めて居た。

主なる來賓の中には某々大臣がたを始め、濟生會の委員、伯子爵の居並ばれるのを見受けた一個人の經營した。事業が斯く迄盛大な會となつた例は日本にまだないであらう。之は山田の信と徳とが天より酬はれたのであらう。

壇上に最初顯れたのは人も知る花園伯夫人、愛と仁とに燃る眼光美しう、謙遜に今日の主意を述べて喝采の中に壇を降りた。次には山田誠一、自分の誇り、自分の事

業の由來を一言も述べずに唯謙遜に諸氏の厚い同情を謝する旨を述べた。簡明な言葉が却て並居る人々の心を動かした。四五人の簡単な祝詞演説が終つて最後に顯れたのが當時名うての新博士大村猛である。

第五十三

恩は山より高く信義は海より深い自分の友なる山田の爲め大村は將に何をか述べんとするのであらう。

心の中の渦巻を更に深く底に捲込んで壇上に立た猛は一個の秀才男子であつた。

演題 斬奸

満堂の貴賓諸君、我輩は今此壇上に立つて喋々として山田君及び貴婦人諸氏の社會的大事業の成立を述べねばなりません。又辱なくも至尊陛下の恩賜金を基とする濟生會が此の事業を發展せしめんが爲め英断なる處置を取つて之れより與へられんとする多くの助けに付いても、之れを世評に任せて、敢て論ずる必要は認めません。

然らば我輩の演題に掲げた斬奸とは何んであらうか、讀んで字の如く世の中の奸佞な徒を斬ると云ふ意味である。然し斬るとは所謂刃を以てせず慙死せしむるの意である。」

諸君の今日の前見らるゝ此孤兒、病者不遇なる人々は天の罰の報か來たつたのもあらう。けれど孤兒の様な無垢な幼兒の中にも其の生ひ立ちの裏面に潜む悲愴慘憺たる事柄は實に其親の過失によつて仕出したる罪によつて、現在其の子らが苦しむのであります。今茲に實例を擧げて諸君の御熟考を促さんとするのであります。

或る漁村に生れた一人の可憐なる女は其美貌が仇となつて親や兄弟の犠牲に供せられ既に毒蛇の餌食とならんとした事は开も幾度でありましたらうか。然るに茲に一人の青年があつて其境遇を憐れみ寄邊なき波に漂ようても猶色變へぬ松の操を深く愛で助けを與へたのが抑の誤り、眩にも「情は即戀の素」と申す通り交はりの深くなるにつけ、添へぬ添はれぬ場合となりました。女の親の怒り烈しく思はぬはづみの一打で女の親を殺すに至つたのです。恰も其時其青年は大學を卒て將に歐洲に出發

し様とする處であつて卑怯にも女の勸むるに任せて後の一切を繼弱き女の手に乗せて彼は遠く歐洲に出發しました實に卑怯な男子ではありませんか。其後の女の苦しみは如何許りであつたか諸君の御推察に任すのですが其時女は既に管の身ではなかつた凡ての秘密は天と地の間によも知る人あるまじと思つたのは誤り、豫て其の女に心をかけた一人の男の知る處となつて、未來永劫、秘密を葬らうと努めて其女は彼の妻となり幾多の辛苦艱難を嘗め盡しても足らず、終に其夫の唇を閉ぢん爲めには鬼とも蛇ともなつて其夫を殺す事にさへ至つたのであります。悲壯極まる振舞ではありませんか終に彼女は其罪の恐ろしさに一子を遺して轢死を遂げ、此世の思出に再び戀人に邂逅する機もなく魂は永遠の苦みを受ける身となりました。

此時聴衆は肅として片唾を呑んで聴いてゐた。大村の顔には一點の曇はないが蒼白に變つて來た其顔は急にこけた様に目の一種凄い光さへ放つた。更に彼は言葉を吐いた。

「彼の青年はかゝる事とは露知らず異郷にあつて安否や如何にと氣悶つて居た時も時

も、骨肉も骨ならぬ親友某が彼に貸與へた帽が證據となつて、あはれ囚れの身となりました。神か人か、其友は青年の身代りとなつて従容服罪したのであります。

大村の聲は顛ふて後の言葉は急に途絶えた。

「諸君かゝる義人が又と此世にあると考へられるでせうか、神の如き彼は地位を捨て身を捨て特赦の後は其生死さへ人に知らせず、剩さへ其青年に對しては自分の友の爲にした事を一言も言はず姿さへも見せなかつたです、一方に故郷懐しく父母戀しく歸朝した青年は身に餘る名譽を荷なつても友の骨を拾ふまでは負債のある心地して百方其行方を求めつつ日夜煩悶慚愧に責められて居つた折から、義人は既に復活して世の光となつて大々の社會事業をなしつゝ猶他人に其名さへ語らないのを發見したのみならず父ありとも母なしとも知らず、不幸に此世に還された一子は幸福に其手に育くまれて居ります。

語る人の涙は渾々として盡きない。此時迄山田夫妻保も文子も忙はしさに來賓席には見えなかつた。

「あゝ諸君、かゝる慘酷なる事情が社會の裏面に潜んで居るかと思へば實に寒心の至りではありませんか、若し、若しも諸君の知人朋友の中にかゝる男子が世の間から紳士とか博士とか言はれて猶自ら愧ぢざる人があつたなら諸君は彼に對して如何なる誅罰を加へんとなし給ふか我輩は先づ天に代りて此の如く罰し様と思ひます。」

瞬を据ゑて聴衆をきつと睨んだ。儘身搖ぎもせぬ大村猛の手がポケットに入るよと見る間に一髪も入れず、一發は美事に心臟を射抜いた。鮮血迸つて壇上は唯見る唐紅。

第五十四

祝の宴は忽ち悲しみの席と化した。大村の内衣裏の中から探り得た遺言狀に因つて彼の亡骸は此天幕の中の壇上に安置された。餘興にとて吹奏した音楽隊は今や悲哀の曲を奏でゝゐる。嗚呼彼れの最後の告白は幾年月の苦しい思ひを取去つて靈魂は永遠に此家に止まり山田の事業を助けるであらう。

父も母も我子の男らしい死を見て悲むよりは寧ろ潔よしと喜んだ其心の奥は如何であらう。

急の變事を聞いて驅寄つた山田夫妻、保、文子等が大村を抱き起した時には、大村の氣息は迫つて今や斷末魔の苦み。

「大村、残念な事をしてくれた、後の事は何にも心配するな、安心して瞑目せいにか山田の言ふ事が判つたか。」

山田の勵ます聲に微かながら目を開いた猛一。

「山田頼む、濟まなかつた、猛一を。」

文子に抱れてゐた猛一を山田は引き取つて大村の顔の側に丸い顔を押し付けた。子供は驚いて泣きもせず。恩愛の羈絆に引返されて大村は、見えぬ目を活と見ひらいた。

「坊や偉くなれ」といひつゝ、我子の顔を打見つた。

「貴郎今迄にお隠しなく明かして下さつたなら此様なお身には致しませんでした。残念で御座います。後は私が屹度引受けて此子を大村家の柱石にする迄は身に代へて育

て上げますから御安心遊ばして御瞑目を願ひます。」

後はよゝと許り泣き伏した。彼女はまば新婚の夢圓かならぬに未亡人となり果た。動かない手に猛一の紅葉の様な手を握つた儘大村は終に粹切れた。

山田に抱かれてしく／＼泣き出した猛一は又もや母を思ひ出してか「母ちゃん、母ちゃん。」と叫ぶ聲の苛らしさに居並ぶ數百の袂は絞られた。

大村家では葬式の費用を省き香奠と共に皆取纏めて貧民の救済に寄附された。

大村の遺骸を載せた輿は幾町となく續く送り人のみで、後先の行列に加はつた。孤兒や工女貧民が世の注意を引く造花放鳥よりは遙に美事であつた。我子に譲る可き遺産を折半して半は山田に半は初めて見し可愛孫の猛一に遺して、大村父母は愛兒の恩人山田に報いた。

少くとも大村の流した。血潮は人の心に忘られぬ記憶となつて山田の事業は之から益世の同情と共に地盤は次第々々に固く築かれたのである。

友

新たに建てられたお君の立派な墓前には香華の絶る事はなかつた。此世で添はれぬ君と大村の靈未來の世では如何であらうか。
 お君を姉と知つた新武藏のお京は大村家に引取られて暫らくの後には佐藤家の花嫁となる可き準備に忙がしがつた。
 嗚呼の世の中に持つ可きものは信ある友にこそ

巨匠
 へ
 へ

友に對する微々たる力
 をよたつていふを

友

終

大馬鹿ある
 馬鹿ある云ふは、其の可憐な姿を以てして、
 友に臨むべきである。貴様の様はおねの
 友に臨むべきである。貴様の様はおねの
 友に臨むべきである。貴様の様はおねの

明治四十五年六月十三日印刷
 明治四十五年六月十六日發行

有所權著作

著者 てい女

發行者 越元次良

東京市日本橋區船場三丁目一番地

印刷者 安田徳次郎

東京市神田區安永町一丁目

禁断興行
 定價金六拾五錢

印刷所 健捷堂活版所

發行所

東京市日本橋區人形町通水天宮側
 東盛堂書店

郵便振替貯金口座
 東京七五〇六番

(208) 友
 友

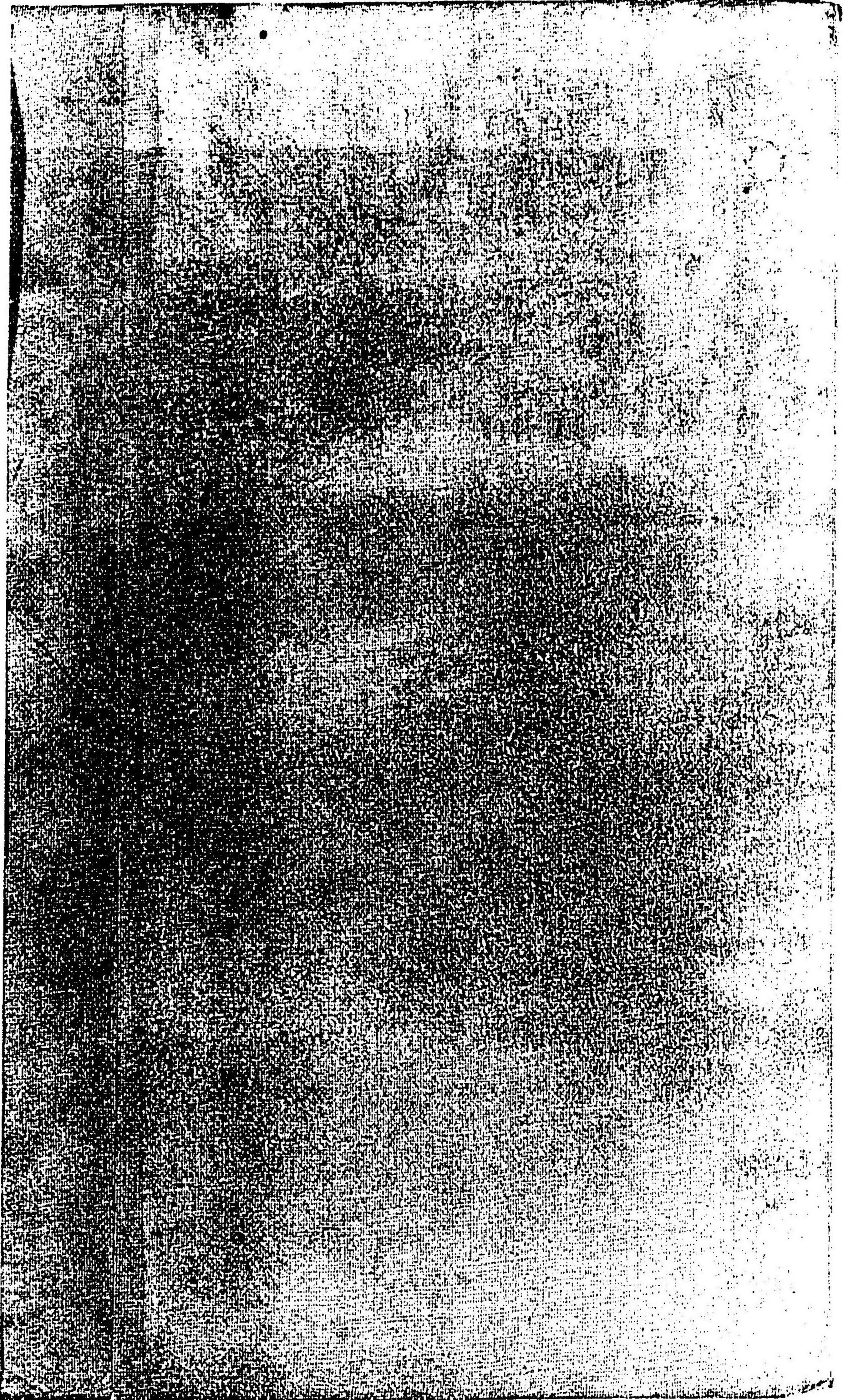
東盛堂新刊小説目録

緑 園 生 著 版三	紫 郷 生 著 版四	匿 名 氏 著 版五	やま 左 衛 門 著 版三	やま 左 衛 門 著 版五	て 東 京 朝 日 新 聞 連 載 著 版新最	銅 泉 木 斜 方 汀 著 刊近
木 村 長 門 守	女 優 妙 子	女 の 操	石 川 寅 次 郎	淺 香 三 四 郎	友	木 遣 り
郵定洋 稅似裝 金金菊 八六判 拾美 錢錢本	郵定女 稅價優 金金の 六四真 拾面 錢錢順 評好	郵定四 稅價六 金金判 四三未 拾會 五有 錢錢美 本本	郵定全 稅價二 金各冊 六金好 四四評 拾吸 錢錢々	郵定全 稅價二 金各冊 六金如 四四薄 拾好 錢錢評	郵定洋 稅價裝 金金菊 八六判 拾美 錢錢本	郵定製 稅價釘 金金額 六六 拾 錢錢美

發行所 東京市日通橋本區 東盛堂書店

329

140



094735-000-5

329-140

友

てい女/著

M45

DBQ-2291



